Seijo Univ.

Curator Course NewsLetter

MARCH 31. 2022

Newsletter from Curator COURSE of Seijo University

CONTENTS

§ 1- 特集「成城大学博物館学講座 博物館実習（考古学）を担当して 」
奈良国立博物館館長　井上洋一
§ 2- 学芸員名鑑第６回
「動き続けた非常勤学芸員の日常」
荒川区立荒川ふるさと文化館学芸員　岡田伊代
「フィールドと博物館」
滋賀県立琵琶湖博物館学芸員　加藤秀雄
§ 3- 巻末言「文化財保護行政と学芸員」
成城大学学芸員課程　小島孝夫
§ 4- 編集後記

成城大学学芸員課程ニュースレター

vol. 06

阿久和宮腰遺跡出土土器（深鉢）
縄文時代中期
（公財）横浜市故郷歴史財団埋蔵文化財センター蔵

Special feature

成城大学博物館学講座 博物館実習（考古学）を担当して

井上洋一（奈良国立博物館長）

■はじめに

昨年四月に東京国立博物館の副館長から奈良国立博物館の館長に就任したことを機に、本年度末をもって、博物館実習（考古学）の担当を退任させていただくことになりました井上です。退任するに当たり、光栄にも小島孝夫先生から、その足跡を残すべく一文を本紙に寄稿せよとのご下命を賜りましたので、ここに記す次第です。

私はこの授業を平成七年（一九九五）四月から、実に二十六年間も担当させていただきました。そのきっかけは、当時、東京国立博物館の上司であり、成城大学でも講義をされていた安藤孝一先生からお話をいただき、民俗学の田中宣一先生にお目にかかり、是非、非常勤講師として出講してほしいとのご依頼を受けました。通常であれば、あとは私が承諾し、これが教授会で承認されれば、いざ出講となるのですが、ここでひとつ問題が。民俗学の鎌田久子先生から私に少し話を聞かせてもらいたいとのお申し出がありました。当時の私は東京国立博物館学芸部考古課先史室長でした。おそらく、鎌田先生には、この「先史室長」という肩書きが気になったのではないかと思われます。それは、かつて成城大学には「縄文学の父」あるいは「日本先史考古学の父」などと評される山内清男（やまのうち すがお）という超一流の先生がいらっしゃいました。考古学の世界では、その名を知らない者は「もぐり」とも言われるほどの超有名人です。山内先生は、日本全国の縄文土器の型式学的編年を組み立てるとともに縄文土器の表面に施された縄目の文様が、「縄文原体」と呼ばれる植物繊維を撚った紐やそれを棒に巻きつけた道具を土器の表面に押し当てたり、コロコロと回転させることによりつけられたものであることを解明したことでも知られています。また山内先生は縄文時代の開始年代の解明や弥生文化における農耕の解明などにも大きな業績を残されています。その山内先生がこの成城大学の教授であったことを知る先生も残念ながら少なくなってしまいました。山内先生は昭和三十七年（一九六二）から成城大学で教鞭をとりながら日本先史学の研究に没頭されました。今では信じられないかもしれませんが当時、成城大学は先史考古学のメッカとして名声を馳せ、名だたる縄文研究者たちが山内先生のもとに集まり研鑽を積んだとわが恩師からも聞いています。こんな有名な先生がいたにもかかわらず、なぜ今、成城大学には考古学研究室もなければ考古学の専攻課程すらないのか。どうやらそれは山内先生に責任の一端はあったようです。山内先生は研究者としては超一流でしたが、大学人としては問題児でもあったようです。鎌田先生は山内先生と同類の者がこの大学に再び入るのを極端に嫌ったのだろうと思っています。しかし、私が山内先生とは違い、銅鐸を中心に日本の青銅器文化を研究していることがわかると、鎌田先生の表情は素晴らしい笑顔に一変。そして、「是非、成城大学に来てください」となった訳です。

■私の授業

こうしてはじまった私の授業は、まずは「皆さんは『考古学』から何を連想しますか」という質問からでした。すると、学生たちからは、発掘・インディージョーンズ・ピラミッド・王家の谷・ツタンカーメン・縄文土器・土偶・古墳・埴輪といった回答が返ってきました。これはテレビや映画、そして教科書などの影響によるものかもしれません。こうした回答を見ても日本人のエジプト好きがわかります。ピラミッド・巨大な神殿・ミイラ、そしてマスクをはじめとする黄金製品の数々。実際に展覧会を企画する側にとっても、やはりエジプトは魅力的なところです。さまざまな謎を秘めた古代エジプト。この謎解きこそ、考古学の醍醐味です。しかし、歴史の謎は、なにも古代エジプトに限られたことではありません。わが日本にも土偶や銅鐸は何のために作られたのか、卑弥呼の邪馬台国はどこにあったのかなど、さまざまな謎が残されています。その謎を解くには多くの遺物・遺跡の分析が欠かせません。研究者たちがそれらを如何に分析し、その謎を解明していくのか。授業では、その過程をさまざまな考古資料をもとに解説し、考古学とはどんな学問なのかということをまず理解してもらうよう努めました。そして、私が重視したのは、考古学は単に古代のロマンを追い求めるものではなく、時代・地域を異にする人間の営みを学ぶことで現在の社会・文化のあり方や自分自身を考えるためにも重要な学問であることを認識してもらい、考古学が明日につながる学問であることを理解してもらうことでした。その上で、学生たちには多種多様な考古資料が収蔵・展示されている博物館ならびにそこで働く学芸員について学んでもらうという手法をとってきました。

遺跡・遺物のもつ意味を考え、それが如何なる過程を経て博物館あるいは美術館の資料となり広く活用されていくのか。授業ではその過程を多角的に捉え講義を進めるとともに、遺物の取扱い方、遺物の拓本・実測図・資料台帳の作成、展覧会等の企画などの実習を通し、学芸員として必要とされる基礎的な知識・技術を学んでもらいました。また、私が仕事や研究で携わってきたエジプト・シリア・トルコなどの中東、ウズベキスタン・アフガニスタン・パキスタンなどの中央アジアや南アジア、そして、欧米・アジア諸国の多くの遺跡や博物館の状況についても話してきました。それは学生たちには歴史・文化の多様性を理解してもらい、少しでも広い視野を持ってほしいとの願いからであり、人類にとってかけがえのない文化財・文化遺産のもつ重要性や各国における博物館のあり方についても理解を深めてもらいたいと思ったからです。さらに、こうした学内での授業とは別に、博物館の見学も重視してきまし

た。それは博物館の展示にはさまざまな研究成果が反映されているからです。そして博物館がその研究成果を展示として具現化し、資料の持つ価値を一般の来館者に対し、わかりやすく提示している場所であり、それを行うのが学芸員の務めであることを現場で感じ取ってもらいたかったからでもあります。そして、その場で資料の「保存」と「活用」の問題を学生たちと一緒に考えることもしました。私は「現場主義」です。現場で考えることの重要性を学生たちには肌で感じてほしいと思っていました。それは現場である博物館が来館者のために存在しているさまざまな学びの場であるからです。

こうしたことを踏まえた上で、まとめとして考古学に関する展覧会の企画も授業で行いました。テーマ、構成、主な作品、展示、広報、予算なども含め、グループで討議し、その発表会を開き、学生たちとともに評価し、すぐにでも実施できそうな優れた企画には賞も出しました。この授業は、私にとっても学生たちの多様な感性を知る良い機会となりました。

■感性を磨く

当初、私の授業には、二クラス七十名ほどの受講生がいました。それがその後の博物館学芸員課程のカリキュラム変更と私の九州国立博物館への異動に伴い、授業日を金曜日から土曜日に変更したのが微妙に絡み合い、受講生は一気に一桁に激減。正直、これには驚きました。カリキュラム変更前は、博物館実習という科目は美術・民俗・考古の三分野から二つを選択しなければなりませんでした。それが変更後は、この三分野から一つのみ選択すればよくなった訳です。ただ、その代わりに学外での館園実習を受けなければならなくなりましたが。学生たちがどの分野を選択するか。それは火を見るより明らかでした。教授陣の層の厚さ、研究室・専攻の有無などにより、学生たちは勢い美術・民俗に向かい、考古学の人気はいまひとつでした。しかし、その結果、私の授業には本当に考古学に興味ある学生が集まり、少数精鋭にして質の高い授業が展開できたのではないかと思っています。それは優れた考古資料を間近でみられ、生きた博物館学を学べる東京国立博物館での授業も行っていたからでもあります。

学生たちにはできる限り本物の資料を見せてあげたい。本物を前にして大いに語り合いたい。本物の持つ魅力、それはリモートの授業ではなかなか感じることも理解することも難しいと思います。博物館資料の一つひとつには、人類の記憶が凝縮されているといっても過言ではありません。その記憶を引き出すのが学芸員の力でもあります。そして、その力を育むのが「感性」だと思っています。それゆえ、学生たちには授業でこの感性を磨くことも強く求め、その感性が今後、自分たちが生きていく上で、極めて重要なものとなることもあわせて話してきたつもりです。

■社会人との交流

ところで、学芸員になるためには固い決意と相当な努力が必要であることは言うまでもありません。それを学生にわからせるため、「学芸員は諦めろ」と敢えてきつい言葉を使われる先生もおられます。しかし、これではなぜ学芸員課程を学部で開講しているのか、わからなくなります。ただし、現実的には学部卒だけでは学芸員になることは難しく、少なくとも修士号は必要とされます。そこで学部卒でも学芸員と同じように、あるいはそれ以上にさまざまな展覧会に関わることができるマスコミの文化事業部の存在とその仕事も授業で紹介してきました。もちろん、こちらも狭き門であることは言うまでもありませんが、私にはどうしたら学芸員になれるのかは指導できても、マスコミの文化事業部にどうしたら就職できるのかというアドバイスはできませんでした。そこで私の文化事業部の仲間たちに声をかけ、大学で授業をしてもらったり、年末に学外での進路相談会を兼ねた食事会（通称、井上会）に出席してもらったり、学生たちに多くのアドバイスをしていただきました。この会はほぼ毎年開催され、二十年間も続いてきました。その甲斐もあり、受講生の何人かはこの道に進んだ学生もいます。また、別の道に進んだ学生たちからも、ここでの社会人との交流を通し、自分が今後、社会人としてどう生きていくべきか、といったことについても多くのことを学ぶことができたという嬉しい意見をもらいました。マスコミの仲間たちにはただただ感謝するばかりです。しかし、二十年もこの会を続けられたのは、毎回幹事を務めてくれた卒業生がいたからでもあります。こちらにも深く感謝する次第です。

■おわりに

この授業を通し、学生一人ひとりが考古学により興味を持ち、博物館には歴史の謎を解く鍵がたくさんあることに気付き、自ら博物館の普段使いをする。そして博物館で自分自身の心を豊かにする体験を数多く積み、それをより多くの方に還元してくれることを願い、これまでこの授業を担当して参りました。その後、研鑽を積み学芸員になった者、そして、学芸員になる夢は破れたものの考古学や博物館に親しみ、素晴らしい感性を獲得し、それを自分の仕事や生活に活かしている卒業生が多くいることを私は嬉しく思っています。

最後になりましたが、小島孝夫先生をはじめ多くの先生方ならびに教務課博物館学芸員課程の職員の方々には本当にお世話になりました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。成城大学の益々の発展を心からお祈り申し上げます。

せわしない非常勤学芸員の日常

岡田伊代（荒川区立荒川ふるさと文化館学芸員）

私は令和四年四月から福井県職員の学芸員として働くことになった。しかし、私は依然として未熟であり、本稿への寄稿も気恥ずかしい。ここでは、せわしない非常勤学芸員の日常とささやかな努力の欠片を振りかえる。学芸員を目指す皆様の一助となれば幸いである。

私が博物館に強く関心を持つようになったのは高校生の頃で、地域の生活の記録し展示する地域博物館が憧れの場所だった。「博物館といえば学芸員」という家族の一言が背中を押し、歴史学の学芸員を目指して成城大学文芸学部文化史学科へ入学したのだが、大学で自分が好んで見ていた展示が民俗学の成果であると知り、さらに小島孝夫先生の文化史実習で民俗学のフィールドワークの面白さに夢中になったことから民俗学を専攻とし、学部在学中に学芸員資格を取得。その後、より専門的な知識を身に着けようと大学院へ進学した。

学芸員資格取得後の初めての経験は、平成二十七年の修士一年生、小島先生と先輩のご厚意でお世話になった中央区立郷土天文館での週一回のアルバイトだった。期待と根拠のない自信を胸に挑んだ初めての学芸補助業務は、大失敗の連続だった。おおざっぱな性格は資料の取り扱いにも影響し、貼りパネルも切れなければ、梱包やデータ入力や管理さえ危うい。カッターの使い方から習う始末である。私の思う完成の水準は全て最底辺以下だった。失敗のたびに真剣に向き合い諭してくれる先輩に支えられた一年間だった。

修士二年では、調査地である墨田区の教育・産業資料室きねがわ（以下、資料室）で、修論の資料調査も兼ねて民具資料の台帳作成に当たった。時には先輩に協力いただきながら、朝九時から夜八時頃まで資料の採寸、観察、カードの作成、データの入力、撮影を繰り返した。しかし、ある時、施設の管理者に「それやって何になるの？」と聞かれたが、手段と目的をはき違えていたのでうまく答えが浮かばなかった苦い記憶がある。苦い思いをした分、学芸員になりたいという目標は諦められなかった。

とはいえ学芸員の職は得られずに時は過ぎ、年末、我孫子市教育委員会の公募を知り、先輩に週三回、崩し字のご指導を戴いて急遽受験。正規の総合職の内定を土壇場で辞退し、平成二十九年四月からは手賀沼干拓の立役者・井上家から寄贈を受けた資料の整理と目録編纂を担う嘱託職員として勤務した。ここでも失敗して混乱するたびに手厚く指導を受け、なんとか仕事していたという記憶ばかりがある。加えて、豊島区の民具整理のアルバイトに参加しはじめた。豊島区では資料館外に収蔵施設を所有しており、新規収蔵品のクリーニングや調査といった資料管理や、展示に必要な資料の取り出し返却、所蔵施設の環境整備等が主な業務だった。加えて都内外の多くの学生・学芸員たちが集っていたため、各館の情報や困りごとを共有する環境にも恵まれた。秋には資料室でも企画展を実施し、目まぐるしい一年だった。

平成三十年二月、我孫子市の任期満了が見えてきた頃、滑りこむように受験した荒川区立荒川ふるさと文化館（以下、文化館）の非常勤学芸員に採用された。文化館は郷土博物館と文化財課の双方の役割を担うため、業務が多岐にわたり膨大だった。具体的には年間で、企画展示（一本）、館蔵資料展（二本）、別展示場二か所の展示替え（各四回）、子供向け講座、展示解説・体験講座（各月一回）、寄贈資料調査、レファレンスと並行して、埋蔵文化財調査、伝統工芸普及事業、文化財審議会、文化財候補資料の調査、祭礼調査、記録映像二種類の作成等と、目の回る業務量を、就職時は週四日勤務の非常勤学芸員（考古、歴史、民俗）五人・事務職六人で運営していた。私は伝統工芸に関する展示事業、資料寄贈関係業務、祭礼調査、工芸技術の文化財指定への調査などを主に担当したが、企画展などは総動員で、毎日予定外の業務発生は当たり前で、気が付いたら午後八、九時というのも日常茶飯事だった。忙しい中でも、調査の際に生活を嬉々として話してくださる方々、一方で寄贈品を家で引き継げない実情、工芸技術を取り巻く職人の生活などの現実にも対峙し、文化財保存や博物館事業の重要を認識できるにも拘わらず、この実態が広く周知されていないことを痛感した。

この間も資料の取り扱いへの経験を積もうと、我孫子市の民具整理、墨田区の文化財調査員、藤沢市の民具整理等を兼業していた。加えて長野県栄村の被災文化財保全活動のボランティアは大きな経験となった。休日の多くはこれらの兼業等や自身の調査などに当てており、体力不足で周囲に迷惑をかけてしまうこともあった。兼業を許可し職場内外で様々な経験を学ばせてくれた文化館、成城の先輩後輩とともに五年間民具整理を任せてくださった我孫子市に心から感謝している。

以上、非常勤の期間に努力してきたことといえば、いろいろな場所へ行き経験を積むことを続けたことだったように思う。職場の蓄積を吸収することと同じように、他館の取り組み、隣接分野の実践、最新の手法を学ぶことは大切である。様々な場で得た多くの経験や人との出会いは、何物にも代えがたい財産に他ならない。そして、どこでも地域のことを一番よく知るのは住民の方々である。地域博物館の学芸員として地域の方と関係性を築きながら、より良い文化財保護の在り方を模索し続けることを一番に考えて、今後も仕事にあたっていきたいと考えている。

子供向けの伝統工芸体験講座で職人さんの補助をする筆者（荒川ふるさと文化館）

民具整理作業（我孫子市 筆者撮影）

フィールドと博物館

加藤秀雄（滋賀県立琵琶湖博物館学芸員）

皆さん、こんにちは。現在、滋賀県立琵琶湖博物館に学芸員として勤めている加藤秀雄といいます。生まれは大分県の別府市ですが、二〇〇二年に上京して成城大学の文化史学科に入学しました。大学では民俗学と文化人類学を学びましたが、先生と先輩たちの姿を見て本格的に研究をしたいと思い、二〇〇六年に成城の大学院に進学しました。大学院を出てからは大学講師、博物館研究員などを務めてきましたが、二〇二一年から琵琶湖博物館の学芸員として働くことになりました。これまでの人生の半分を九州で、残りの半分を関東で過ごしましたが、これからしばらくは関西で活動することになりそうです。

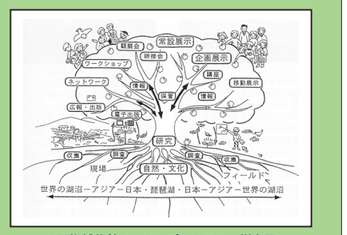
琵琶湖博物館は、「湖と人間」をテーマに掲げて一九九六年に開館した博物館で、二〇二一年に二十五周年を迎えました。関西では広く知られている博物館で、年間約四十万人の来館者が訪れます。二〇二〇年には六年かけて行ったリニューアルも完成し、私が専門とする民俗学の展示も、最新の研究成果を取り入れたものになりました。コロナ禍の影響で展示を観るには予約が必要ですが（※二〇二一年十二月現在）、関西圏にお越しの際は是非お立ち寄りください。

さて、琵琶湖は日本一大きな湖として有名ですが、その起源が四百万年前にまで遡る世界的にも珍しい湖です（たいていの湖の寿命は数千年から一万年ほどといわれています）。そしてこれだけ長い時間、存在し続けたことによって、琵琶湖には独自の生態系が築かれていきました。この湖にしかいない生き物、いわゆる固有種が六十一種類おり、生物の進化について考える上で貴重な存在になっています。また人間も琵琶湖を中心とする自然環境を巧みに利用しながら暮らしてきたわけですが、このような自然と人の関わりを研究し、それを展示に活かすには様々な分野の専門家が必要です。琵琶湖博物館には地質、化石、鳥、魚、虫、微生物、植物、環境、考古、歴史、地理など、専門分野の異なる学芸員が約三十名所属していますが、私はそのなかの民俗を担当しているということになります。

琵琶湖博物館の特徴は、このような多種多様な分野の専門家がいて、それぞれの専門性を活かしながら領域横断的な研究活動を行っていることです。そしてその土台となる調査と資料収集は、「現場」に行くことから始まります。民俗学や文化人類学を学んだことがある人なら一度は耳にしたことがあるであろう「フィールドワーク」です。私はこの博物館に来るまでフィールドワークというと、調査地で何が起きているか観察し、人から話を聞く、そして一緒に何かすることだと思っていたのですが、地質学者も生物学者も「フィールド」という言葉を頻繁に使います。当たり前のことですが、民俗学者がフィールドワークの中で人の生活に関心を向けるように、魚類学者は魚に関心を向け、地質学者ならその土地の地層などに関心をもちます。つまり専門分野が異なれば、同じフィールドに行っても見ているもの、やっていることが違ってくるのです。このフィールドに対する向き合い方の違いが、琵琶湖博物館の研究と展示を面白いものにしていると感じます。

例えば滋賀県には、フナズシという郷土料理があります。フナズシはニゴロブナという琵琶湖固有種のフナを使って作りますが、近年その数を急激に減らしており、聞き取り調査でも「数年前からニゴロが取れなくなった」という話がよく聞かれます。その原因を明らかにするためには、ニゴロブナの生態、ニゴロブナを獲る方法、フナズシの歴史、琵琶湖の環境変化などの問題にアプローチする必要があるでしょう。そして、この博物館にはそれぞれの分野の専門家がいるので、「ニゴロブナの減少」という問題一つとってみても、様々な観点から研究することが可能です。そしてその成果を展示やシンポジウムなどのかたちで発信するわけですが、その成果はフィールドにも還元され、次の調査に結びつくことになります。琵琶湖博物館はその構想段階から「フィールドと博物館の循環」を重要なコンセプトとして掲げていましたが、それを象徴するのがリニューアルした展示空間の最後に壁に書かれている「さぁ、ほんものの琵琶湖（フィールド）へ出かけよう！」という言葉です。

学芸員を目指している皆さんは、「モノが好き」、「展示を作ってみたい」、「大学で学んだ専門性を活かしたい」など様々な理由でこの仕事を目指していると思いますが、ぜひ学芸員になったら博物館の外＝フィールドにも足を運んで、そこで得たものを博物館に持ち帰って研究する、そしてそれをフィールドに還元するというサイクルを意識するような学芸員になってほしいと思います。



琵琶湖博物館のコンセプトを示した樹木図

リニューアルしたB展示室 湖の２万年と私たち

収蔵庫内で作業をする筆者

巻末言

小島孝夫
（成城大学学芸員課程）

地域博物館に勤務する学芸員には、今後、文化財保護行政の担い手としての役割が期待されていくことになる。

令和２年１０月から１２月まで文化庁の企画調査会に参画することになり、無形の文化財の在り方等に関する検討を行い、検討内容を報告書として刊行した。報告書では、無形の文化財について、より幅広く保存・活用を図るために、従前の指定制度を補完するものとして新たに登録制度の創設が必要であることを提言した。

また、文化財保護法に根拠規定がある指定制度のほかに、法には規定がないために地方公共団体による文化財の保護策として条例を独自に定めて先行的に実施されていた登録制度を文化財保護法上の制度として位置づけ、地方の創意により活用できるようにすることも提言した。さらに、茶道、華道、書道や食文化などの生活文化に関する文化財に対しても、今回創設する登録制度の新たな対象として、積極的に保護措置を講じていくことについて提言した。

これらの提言を基にした文化財保護法の一部を改正する法律により新設された登録無形民俗文化財・登録無形文化財制度により、前者では「讃岐の醤油醸造技術」と「土佐節の製造技術」が登録され、後者では「書道」と「伝統的酒造り」が文部科学大臣に答申された。後者の２件はともに、将来的にはユネスコの無形文化遺産の登録を目指すことが想定されている。新たに創設された登録制度はこのように運営されていくことになる。

前述の登録制度創設の伏線となる制度が存在している。平成３０年６月の文化財保護法の改正により、都道府県による文化財保存活用大綱の策定、市町村が作成する文化財保存活用地域計画の文化庁長官による認定、市町村による文化財保存活用支援団体の指定等が制度化された。文化財保存活用地域計画を作成することの目的は、文化財保存活用地域計画の作成過程で調査・把握された未指定文化財のうち、滅失・散逸等の危機にあるものに対して速やかな保護措置を講じるとともに、指定文化財に比べて緩やかな保護となる登録制度を活用して、所有者等の創意による様々な活用を促進することである。そして、当該計画が国の認定を受けた場合、当該計画に基づいて実施される取組みに対し、「文化財保存活用地域計画等を活用した観光拠点づくり事業」（文化芸術振興費補助金）の活用が可能になるというメリットがある。「観光拠点」という概念は安倍政権が目指したインバンドを対象とした観光立国施策の名残でもあるが、文化財保護行政に対して自前の予算だけでは対応できなくなっている地方公共団体では、この制度を活用することで当該地域住民に地域の成りたちや移り変わりを啓蒙することができる契機となることが期待され認定への取組みが模索されている。当該地域計画を作成する機会に参画してみると、当該地域の成りたちと移り変わりを客観的かつ総体的に把握しているのは当該地域の学芸員であることに気づくことになる。

このように、今後の地域博物館の学芸員は、博物館を拠点として当該地域の文化財保護行政の推進にも深く関わっていくことになる。学芸員は当該地域研究の紐帯としての役割が期待されていくことになる。今年は民俗分野だけでも専任の学芸員として５名が採用され、学芸員として研鑽を積んでいた卒業生が文化庁の民俗担当調査官に採用された。彼らにも地域社会や文化財保護行政とをつなぐ環の一員として活躍してほしい。

最後に、文化庁では博物館制度の今後の在り方が審議されており、現状の博物館の登録制度に関して、設置主体の拡大を検討している。その拡大の対象が博物館類似施設にまでおよぶことになるとしたら、学芸員を配置することを前提としたものでなければならない。登録制度の法改正に際してパブリックコメントの機会が設けられた場合には、現場の学芸員のみなさんも積極的に意見を述べてほしい。

成城大学学芸員課程ニュースレター vol. 06
Seijo University Curator Course NewsLetter
発行：成城大学学芸員課程委員会
157－8511　東京都世田谷区成城６－１－20
TEL 03－3482－9045
mail：gakugei_nl_s@seijo.jp
編集担当　吉井大門　篠原 聰
2022 年 3 月31日 発行

【編集後記】
年２号分発行を予定していた本誌であるが、出口の見えないコロナ禍における影響もあり本年度は、本号のみの発行となる。特集では井上洋一先生に、学芸員名鑑では民俗分野からご寄稿いただいた。これまで巻頭掲載していた成城大学学芸員課程の先生の巻頭言は、編集の都合上巻末となる。登録制度の設置主体の拡大、その後予想される博物館法の改正は、学芸員が地域文化財のキーとしてより一層活躍できる制度改革になるのだろうか。それは現場の学芸員の疲弊につながる？つながらない？どっち。と聞かれたら後者をのぞみたい。本号の表紙は、筆者がこの冬担当した展覧会に出品したお気に入りの縄文土器のうちのひとつ。（Y）